

玉虫厨子須弥座腰部隅柱の透彫り金具文様について

上原和説における文様分析と様式史的位置づけへの批判

山 本 謙 治

玉虫厨子透彫り文様と上原和説

法隆寺の玉虫厨子には彩色文様12種、透彫り文様10種（連珠文を除く）におよぶ豊富な装飾文様が残されている。玉虫厨子の制作年代は論者により若干の幅があるが、基準作あるいは基準的作例の乏しい古代文様史において、同作品の装飾文様は積極的に位置づけされる必要がある。先に「玉虫厨子透彫り金具廻龍文系文様の造形分析」と題して、透彫り文様10種、なかでも他に類例が見られず独自性の顕著な須弥座腰部隅柱の透彫り文様を中心に基礎的な造形分析を試みた¹⁾。これは従来の文様研究ではモチーフによる起源・系統論が先行し、個々の文様の形を分析する基本的方法が確立しておらず、対象文様のなかから立論に都合のよい一部分の形だけを抽出して問題化する傾向が強いことに対する反省を踏まえての試みであった。

その際、従来の代表的研究として伊東忠太・小杉一雄・上原和三氏の説に言及した。玉虫厨子の透彫り文様を最初に問題化したのは伊東忠太であるが、伊東はこれを甲類・乙類の二種類に分類し、甲類は花弁がないことを除けば彩色文様と同系の忍冬（パルメット）文様であり、一見して甲類とは異なるように見える乙類も忍冬文から変化したものと結論づけた²⁾。これに対して小杉一雄は伊東のいう乙類文様の起源は、中国古代の分立流雲文（後に分立爬虫唐草、分立竜唐草と名称を変更）にあるとした³⁾。ただしここで乙類文様というが、伊東・小杉が実際に考察の対象としたのは乙類文様のなかでも須弥座隅柱の文様のみであった。上原もまたこ

の文様を対象として論を進め、独自の文様分析を行ない、その様式史的位置づけを主張した。小杉の起源論はほぼ定説化しており、上原の文様分析や様式史的位置づけも細部に異論はあっても大勢においては特に批判もなく通説化している。しかし両説には根本となる文様分析の方法において疑問を感じざるを得ない点が多く、その一部については前稿で指摘しておいた⁴⁾。ただそれは文様分析の過程で付加的に言及したものであるため、両説の一部を取り上げるに過ぎなかった。しかしながら玉虫厨子文様の研究において小杉・上原説の影響が極めて大きなものであることを考えると、両説を無批判に容認することはできない。そこで本稿では上原説に対して批判的検討を加え、問題の所在を明らかにしていきたい。

いうまでもなく上原和は玉虫厨子研究の第一人者として知られるところであり、建築、絵画、文様など、玉虫厨子についてさまざまな観点から30編ほどの論考を発表されている。これらのなかで玉虫厨子の文様を直接問題化しているのは「玉虫厨子制作年代考（六） 文様意匠より見た玉虫厨子の様式年代について」（『成城文芸』29、1962年）である⁵⁾。この論文における透彫り文様に関する上原説の論旨は以下の4点に要約される⁶⁾。

透彫り文様については、これを甲類と乙類に分類する伊東忠太説と、乙類文様の起源を分立爬虫唐草とする小杉一雄説を容認する⁷⁾。

伊東説の甲類も、乙類と同様に、その起源は中国固有の龍をモチーフとする蟠螭文より発した動物文系の唐草文であり、我が国にお

ける盛行年代は、法隆寺金銅幡縁飾のパルメット唐草文などの純植物文系文様よりも十分に遡る⁸⁾。

須弥座腰部隅柱の透彫り文様を「逆ハート形中心飾り」と名づけ、その形式的特徴を、(a)逆ハート形の身部、(b)二つのC字形の背中合わせの組み合わせであるX字形の脚部、この二部分から組成されるもので、さらにその身部内が空洞であるとする。

こうした形式的特徴をもつ「逆ハート形中心飾り」の我が国における様式史的位置づけを検討し、法隆寺夢殿救世観音像や金堂四天王像の宝冠文様よりも年代の先行するものであるとする。また「逆ハート形中心飾り」が変形した文様が3種、それより派生した文様が3種あるとする。

以下、本稿では の文様分析と の様式史的
位置づけについて検討をおこなう。

上原説の文様分析に対する批判

1. 「逆ハート形中心飾」と「X字形の脚」について

須弥座腰部隅柱透彫り文様に関する上原の文様分析において、主張の根本となっているのは「逆ハート形中心飾」と「X字形の脚」という文様概念である。まず前者から検討してみる。逆ハート形という言葉は、須弥座腰部隅柱文様の論述に常につきまとう形式語であるが、この文様のどの部分を指して逆ハート形というかは研究者によって違っている。この点が問題で、逆ハート形というような単純な形は、装飾文様においては多用されるものであって、類例を検出する場合、どこの部分にどのような逆ハート形という形式的な特徴が見られる文様であるかを明確にして造形比較をしなければ意味がない。こうしたことは論述の前提として、文様形式に即して明確に規定すべきことであり、あるいは図示すれば容易に明確になることであるが、我が国の文様史研究ではこうした前提作業がなおざりにされてきた。上原もまた同様であ

り、このことが上原の記述を曖昧で解りにくいものにしている。以下では逆ハート形に関する上原の叙述を抜き出ししながら、この点を明確にしておく。

- (1) 乙類に属する文様は6種ほど数えられるわけであるが、その飾面は縦飾帯と横飾帯とに分けられ、それぞれの縦、横の飾帯空間の性質上、縦飾帯の方は、モチーフが縦に反復して積み重ねられてゆき、他方、横飾帯の方は、モチーフが連続波状の主軸線に沿って左右交互に反復継起してゆき、それぞれのモチーフは、単純、複雑の差こそあれ、いずれも逆ハート形を中心飾とする、種々様々のシンメトリカルな蕨手の組み合わせである。これはさきに見た甲グループ唐草文にはいっさい見られなかったものであり、また正統なパルメット唐草文には、いっさい現われることのない特異な形式的特徴である⁹⁾。

これは上原が「逆ハート形中心飾」の言葉を最初に用いた箇所であるが、それがどのような形式を指すのかの具体的説明はない。乙類文様6種の「それぞれのモチーフは、単純、複雑の差こそあれ、いずれも逆ハート形を中心飾とする、種々様々のシンメトリカルな蕨手の組み合わせである」というのであるが、これではどの部分を逆ハート形といているのか理解しがたい。乙類文様では乙類7にはそれらしきものはなく、乙類4・5は単純な水滴形、乙類6もシンプルな宝珠形様であり、乙類2・3と乙類1ではまったく文様構成が異なる。これらの形式的な相違は、「単純、複雑の差こそあれ」と一括にできるものではなく、根本的に別種のものである¹⁰⁾。

- (2) 伊東・小杉両博士の御説も、この逆ハート形の中心飾を何と解釈するか、という問題をめぐって展開されているのである。なお、ここで最も典型的にこの種の文様の形式的特徴が示されているのは、玉虫厨子の宮殿および須弥座の装飾角柱に見られる金銅透彫文様においてである。(中略)[伊東]博士は、まず須弥座の装飾角柱の金銅透彫文の逆ハート形中心飾をとりあげて論を進めていかれるのであ

るが、その際、一番注目なされたのは、逆ハート形中心飾の正中に生じている猪の目形の空穴であった¹¹⁾。

この須弥座裝飾角柱の金銅透彫文とは図1に示した文様である。上原のいうように、伊東は確かに乙類文様の特色が猪目形の空孔にあると主張している。しかし実際には「正中に猪の目形、或は倒心臓形とも云へる形の空穴を生ずる」¹²⁾と述べているのであって、ここにいう倒心臓形(逆ハート形)とは猪目形そのもののことを指しているのである。形式語として逆ハート形を使用するならば、伊東のように猪目形の穴のことをいうのがもっともわかりやすく当を得ている。しかし、上原はこれを、伊東が一番注目したのは「逆ハート形中心飾の正中に生じている猪の目形の空穴であった」と言い換えているのである。つまり上原のいう逆ハート形とは、猪目形空孔ではなく、その外周の輪郭(図1の)をさしていると考えなければならない。この輪郭は先端が尖り、左右二ヶ所ずつ隆起部分があり五山形とでもいうべき形になっている。さらにこの左右にC字形(A・B)が付加されているが、上原はこれらのC字形を除いた五山形を「逆ハート形中心飾」と呼んでいるのだろうが、はたしてこれは当を得たことであろうか。

(3)なお、玉虫厨子の場合、逆ハート形中心飾は、同じく逆ハート形外飾に包まれるわけであるが、そうした内形と外形との複合形の組成にも、一定した嵌込み方法が、扶余出土遺品にも同様に見られることを指摘されている¹³⁾。

この記述は小杉一雄が説く分立爬虫唐草の一特色である複合組成法を解説している部分である¹⁴⁾。ただし小杉自身は猪の目形という言葉は多用するが、逆ハート形という言葉は用いてはあらず、この点は伊東と同じである。また上原はここで初めて「逆ハート形中心飾」に対して「逆ハート形外飾」という言葉を使用している。この「逆ハート形外飾」とは図1の に対して、この外側を取り巻く部分を指しているのであろう。したが

って図1でいえば、上原は「逆ハート形」という形式語を、猪目形空孔→内部の輪郭→外側の輪郭と順次拡大して使用していると理解せざるを得ないが、はたしてこの三つの部分を同じ形式語で呼ぶことは当を得たことであろうか。

(4)さて、この逆ハート形中心飾の形式的特徴の基本形を把握しておく、逆ハート形中心飾は、逆ハート形のみで現われるのではなく、必ずといってよいくらい、X字形の脚を伴っていることに気がつく。すなわち、逆ハート形の身部と、二つのC字形の背中合わせの組み合わせであるX字形の脚部から組成されているのである。その際、逆ハート形の身部内は空洞であることも逸してならない特徴である¹⁵⁾。

これは「X字形の脚」に関する上原の最初の記述部分であるが、この辺りから上原の文様分析はさらに理解しがたくなる。先の(2)と(3)の記述では、上原のいう「逆ハート形中心飾」とは、猪目形空孔をもった五山形、つまり図1の部分のはずであった。特に(3)で「逆ハート形中心飾」は「逆ハート形外飾」に包まれると述べているのだから、両者は別の文様単位と考えられているはずである。ところがここに至って、上原は「逆ハート形中心飾」は「逆ハート形の身部」と「X字形の脚部」の二つの部分から組成された文様であると主張する。「二つのC字形の背中合わせの組み合わせである

猪目形空孔

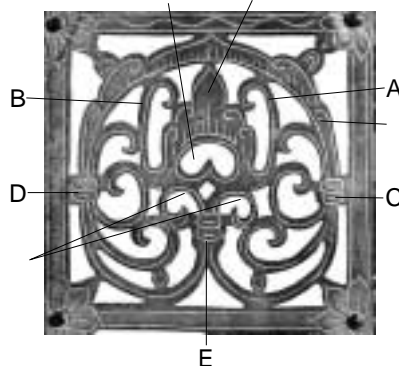


図1 須弥座腰部隅柱透彫り文様



図2 上原説の逆ハート形中心飾

「X字形の脚部」とは、図1で見れば、逆ハート形外飾の左右結束帯(C・D)から下にのびて結束帯Eの部分で先端が左右に反転した巻き込み曲線のことなのであろう。こうなると上原が須弥座腰部隅柱文様から抽出した「逆ハート形中心飾」という文様は図2のような形となるのであるが、はたしてこれを一つの単位文様と考えてよいものであろうか。

2. 須弥座腰部隅柱透彫り金具の文様分析

個別文様の分析法については、従来これを明確に規定して分析を行なった研究は少ない。長広敏雄が「単位モチーフ」という概念を使用するが、これは個々の文様の形成を具体的に分析するには役立たない¹⁶⁾。そこで本論では、個々の文様の形式分析にあたっては、以下の文様概念を使用することにする。

文様要素……文様の最小単位。半C字形・C字形・S字形・紡錘形・円形・葉形など、それ以上に分解できない単純な形であり、形式語で示す。文様要素は単位文様を形作る個々の部品として使用される場合と、単位文様を配置した余剰空間に充填される場合がある。単位文様……いくつかの文様要素から構成され、ひとつのまとまった文様単位として、随所に反復して用いられるもの。文様要素に分解できない場合もあるが、その場合は文様要素よりも複雑な形式をもつ。あるモチーフを文様化して生みだされた形式であることが明白である場合は単位モチーフともよべる。ある単位文様にさらにいくつかの文様要素が組み合わされて、別の単位文様を形成する場合もある。

文様ユニット……単位文様が複数組み合わせられてできる文様単位。単位文様は同種のもの組み合わせの場合と、異なる単位文様の組み合わせの場合がある。組み合わせられる単位文様間の余剰空間には文様要素が充填される場合が多い。

さて須弥座腰部隅柱透彫り金具文様(以下須弥座文様と略す)は縦帯状の空間を12のほぼ正

方形の区画に分け、その各区画内に他に類例を見ない特殊な文様を独立して配置している。この文様は一見複雑であるが、空間充填のための文様要素である半C字形を取り除いていけば、猪目形空孔山形という単位文様と逆ハート形巻き込み曲線という単位文様、これら二種類の単位文様が組み合わされた文様ユニットとして考えるべきであろう。従来の研究ではこの点が認識されていなかったために、小杉・上原説のように誤った文様分析がなされることになった。

【単位文様】(図3・)

まず外側の単位文様は左右対称の構成で、尖拱形の上辺部AからB・C二箇所ずつ隆起しながら裾がのび、結束帯Dに至る。AからCにかけては平行細線、隆起部分B・Cには半C字形が陰刻される。Dから先にのびた曲線は湾曲して逆ハート形の輪を作り、結束帯Eで束ねられて、先端はさらに左右に分かれて巻込む(F)。

【単位文様】(図4)

単位文様は単位文様下部の左右の巻き込みFと尖拱形上辺部Aとの間にあいた空間に配置されるものである(図3・)。単位文様の外側輪郭は単位文様とは似て非なるもので、上部Gは尖拱形というよりは明瞭な山形で、と同様に左右にH・I二箇所ずつ隆起しながら裾がのびるが、その隆起の高さはよりもずっと高く、五山形とでもいうべき形である。また平行細線と半C字形が陰刻されるのはに同じであるが、と異なるのは、Iから先にのびた左右の曲線はJにおいて接合してとどまり、のような結束帯Eや左右の巻き込みFを作らない点である。その結果、の内部には猪目空間Kが形成されることになる。

この猪目形空孔五山形の左右にはC字形(L・M)が付加される。このふたつのC字形は単位文様との余剰空間を埋める文様要素と考えることもできる。しかし両C字形が五山形の輪郭と融合しており、隆起部分Iに刻まれた陰刻線も両C字形(L・M)の陰刻線へと連続した一本の線になっていることからすると、この両C字形を付加した形は単位文様の発展

形と考えるのが妥当であろう。

単位文様 のなかに単位文様 を配すると図 3・ となり、これら両者の間に残された空間に結束帯 D から上方に一つの半 C 字形文様要素 (N), 下方に二つの半 C 字形文様要素 (O ・ P), を出して、半 C 字形 P と逆ハート形巻込み曲線の湾曲部との間に円形文様要素 Q を充填すると、須弥座文様が完成する (図 3・)。

以上のように須弥座文様を分析してみれば、上原の文様分析の誤りは明白であろう。上原は最初に「逆ハート形中心飾」と「逆ハート形外飾」というているが、この場合、名称の当否は別として、前者が図 4 の単位文様 を、後者が図 3 の単位文様 を指すと考えられ、文様分析自体に誤りはない。しかしこれが「逆ハート形中心飾」は「逆ハート形の身部」と「X 字形の脚部」の二つの部分から組成された文様であるという主張になるとまったくの誤りである。この場合、「逆ハート形の身部」が図 4 単位文様 , 「X 字形の脚部」は図 3 単位文様 の巻き込み曲線部分を指しているのであろう。しかし単位文様 は単位文様 (逆ハート形外飾) の結束帯 E よりの上のびた巻き込み曲線 F の上にのせられて配置されているのである。巻き込み曲線 F はあくまで単位文様 の一部として結束帯 D から伸びてきて、結束帯 E の部分で先端が左右に反転したものであり、この部分だけを単位文様 から都合よく切り離すことはできない。まして単位文様 の一部分を構成する文様要素で

あるかのように「X 字形の脚部」などということは、文様がいかに形作られるかの基本を無視した文様分析であるといわねばならない。須弥座文様においては「X 字形の脚部」などは存在しないのである。

ところで単位文様 と をともに「逆ハート形」という形式語で示すことの当否はどうであろうか。これは単に名称の問題ではなく、両者を同性質の文様と考えるか否かという造形上の問題である。林良一は須弥座文様を「同性質の逆ハート形を二重にし、外側のものを結節帯を伴う団花文風な構成にまとめた形式を単位としている」¹⁷⁾と説明しているが、これなどは上原説を無批判に継承しているもので、こうした考え方が現在の趨勢であるといってよい。しかし単位文様 と単位文様 は「同性質の逆ハート形」とまとめられるものではない。

単位文様 の輪郭を逆ハート形とよぶことは、外形だけを見れば許容されるであろうが、単位文様 の重要な形式的特色は先端が内部に巻き込んだ F の部分と E の結束帯である (図 3・)。この特色が従来須弥座文様の祖型とされてきた扶余陵山里古墳出土透彫り金具文様との造形系譜上の相違点であり、小杉がその組成論で見誤った点である¹⁸⁾。一方、図 4 の単位文様の形式特徴は上辺部の五つの凹凸が大きいことと、下部接点 J が巻き込まずに閉じて猪目形をつくることである。これらの特徴が C 字形虬龍文の形式に連続する最重要の部分であ



図 3 須弥座腰部隅柱透彫り金具の文様分析

り、扶余出土金具に共通する点である。このように単位文様 と の形式特徴ははっきりと異なっており、これを同性質の文様ということはできない。にもかかわらず、両者を一律に逆ハート形という形式語でまとめてしまうならば、文様の形式分析をおこなうこと自体に意味がなくなってしまう¹⁹⁾。両単位文様が無関係に用いられるならばまだしも、同一文様のなかで用いられているのであるからなおさらであろう。

このように須弥座文様は異なった形式特徴の単位文様 と から構成されているのだが、上原は単位文様 の一部分を切り離して単位文様 に加えてしまった。この誤りの原因は単位文様という文様分析概念を明確にしていなかったことだけではない。(4)で上原は「二つのC字形の背中合わせの組み合わせであるX字形の脚部から組成されている」と述べているが、これは伊藤、小杉が須弥座文様の祖型と考えた扶余出土金具文様を意識しての記述であり、両者を安易に同一視したための結果であったのだろう。そこで次に扶余出土金具文様の分析をおこなってみる。

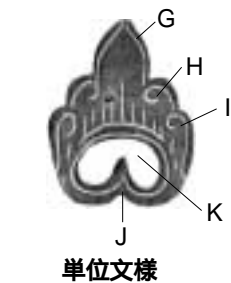


図4
須弥座腰部隅柱透彫り
金具の単位文様

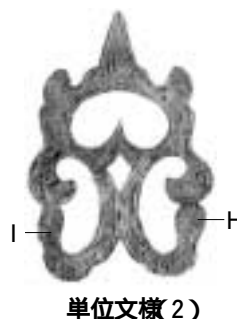
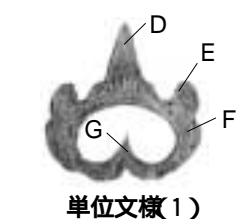


図6
扶余陵山里古墳金具
の単位文様

3. 扶余陵山里古墳出土透彫り金具の文様分析

現在韓国中央博物館の所蔵である扶余陵山里古墳出土透彫り金具(以下扶余金具と略す)は、伊東が玉虫須弥座腰部隅柱透彫り金具文様(以下玉虫金具文様と略す)の祖型として提示して以来、どの研究者の論においても、常に玉虫金具文様を考える重要な鍵とされてきた。小杉は玉虫金具文様の起源が分立爬虫唐草にあることを証明するための作例として使用し、上原もまた伊東同様にこれを玉虫金具文様の祖型とした。しかし、このような重要性をもつ作例でありながら、どの研究者もこの作例の具体的な文様分析を行なってはならず、いずれも立論に都合のよい文様部分だけを取り上げているというのが実情である。扶余金具文様については前稿においても一度分析を試みているが²⁰⁾、ここでは玉虫金具文様との相違点を明確にしておく。

扶余金具文様の外部の輪郭は図5・ のようになる。上辺部Aは須弥座文様のような尖拱形ではなく三山形で、その左右に二箇所ずつ隆起部分(B・C)を作る。輪郭の左右辺および下辺の三辺は直線となるが、これはあくまで金具の区画であり文様の一部とはなっていない。したがってこれを玉虫金具文様の単位文様 と同質のものと考えてはならない。この点が重要であり、玉虫金具文様では単位文様 が単位文様 を内包しているが、扶余金具文様では区画内部の単位文様を包む単位文様は存在しないということである。

この区画の内部空間には単位文様1が配される(図5・)。図6のように単位文様1の上辺部は外部輪郭上辺部Aよりも中央部が尖った三山形Dで、その左右に二箇所の隆起部分(E・F)を作り、両裾は内側に反転してGで閉じ、巻き込みはなく、結果として内部に猪目形の空孔ができています。この単位文様1が中国虬龍文にみられる瘤節をもつC字形の変形であることに異論はないだろう。そして図6と図4を比較すれば、単位文様1の瘤節部分が形式的に整理されたものが玉虫金具文様の単位文様 であると

考えることは妥当であろう。しかしこのことは扶余金具文様がただちに玉虫金具文様の祖型であるということではなく、前者の単位文様(1)が後者の単位文様の祖型であるということを示すものでしかないことに注意せねばならない。

次に、この単位文様(1)の下に背中合わせにした二つのC字形(H・I)が配される(図5・)。そして残された空間に四つの半C字形(J～M)が充填されて扶余金具文様は完成する(図5・)。

）。この場合、単位文様(1)の左右に付加された半C字形(J・K)と外郭上辺部の曲線を合わせると、玉虫金具の単位文様の左右にC字形が配されているのと同様にみえるが、外郭上辺部の先端と半C字形(J・K)の先端との接点(N・O)を詳察してみると、両接点には区切れがあり、上辺部の先端と半C字形(J・K)は連続したものではないことがわかる。したがってJ・Kは単位文様(1)に付加されたC字形ではなく、単位文様(1)と金具外縁との間に充填された半C字形と考えるほうがよいであろう。問題は図6にみるように、単位文様(1)の下方に二つの背中合わせのC字形(H・I)を加えたものを一つの単位文様と考えるかどうかである。後述のように、関連作例を検討すると、単位文様(1)の下方に二つのC字形をもつ形は多用されている。したがって、単位文様(1)はC字形を加えられることによって、新たな単位文様(2)を形成していると考えてよいであろう。

このように見てくると、図6の扶余金具単位文様2)は、まさに上原がいうように「逆ハート形の身部と、二つのC字形の背中合わせの組み

合わせであるX字形の脚部から組成された文様」と認めることができる。しかしこの扶余金具文様の構成法が、玉虫金具文様の構成法とまったく異なるものであることは上述のとおりで、単位文様②の説明を玉虫金具文様に適合させることはできない。おそらく上原は、前者が後者の祖型であるという先入観から、玉虫金具文様にX字形という文様要素を抽出したのであろう。

玉虫金具の単位文様（図4）は扶余金具にみられる単位文様（1）（図6）と同系統であり、瘤節を残した虺龍文系C字形の変形である。単位文様が側面左右に二つのC字形を融合させているのは、単位文様（1）からの形式進展であるといえよう。この両者がいずれも植物文様の要素を持たないのに対して、玉虫金具の単位文様（図3）では、左右Dと下部Eの結束帯や先端の巻き込みFなど植物系文様の要素が見られる。これは単位文様が単位文様（1）や単位文様とは別系統のものであることを示すと考えてよいであろう。従来は玉虫厨子の単位文様とを同性質のものとして、両者の祖型を一律に扶余金具文様に求めていたのであるが、それでは単位文様の生成過程を明らかにすることはできないように思われる。

上原説の様式史的位置づけに対する批判

上原はさらに「玉虫厨子の様式年代を考える」上では、玉虫厨子に見るこうした逆ハート形中心飾の我が国上代における様式史的位置付け

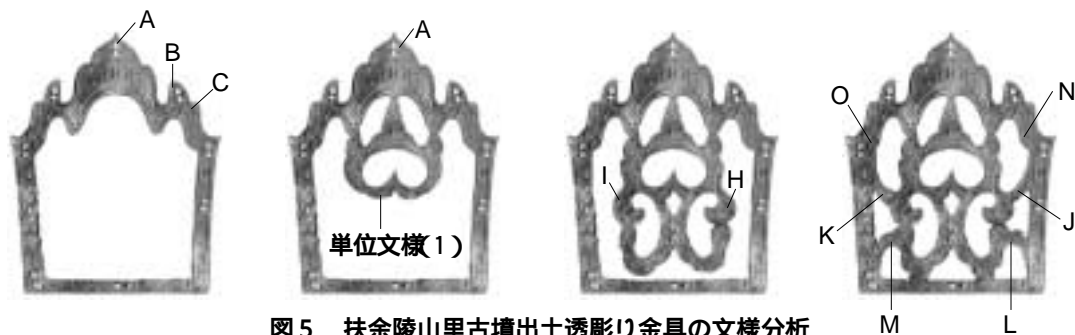


図5 扶余陵山里古墳出土透彫り金具の文様分析

が、次に問題になるはずである」²¹⁾と論を進める。玉虫金具文様の形式的特徴を「X字形の脚を伴う逆ハート形中心飾」と規定した上原は、これを「ひきがえる形中心飾文」²²⁾と命名して、その形式変容をたどり、様式史的位置づけを行っている。この試みは文様分析の出発点において誤りがあるわけであるが、上原以前の研究が関連作例を列挙するだけであったのに対して、関連作例を結んで、その間にある造形的な意味づけ、位置づけを試みようとしている点は評価できる。また上原が提示した諸作例が、玉虫金具文様の成立展開を考えるためには不可欠な基本的作例であることも確かである。

1. 法隆寺金堂四天王像と救世観音像の宝冠文様

上原はまず「X字形の脚を伴う逆ハート形中心飾（ひきがえる形中心飾文）」の変形硬化した作例として、法隆寺の夢殿観音像宝冠中央部文様と金堂四天王像宝冠前額部横帯の文様をあげて、その形式展開を次のように説明する。

すなわち、ともに玉虫厨子の例で見るようなX字形の脚が、逆ハート形の外側をめぐってその尖頂上で完結するという団華状の外縁を失い、ひきがえる形は、もはや玉虫厨子の例で見るような、固有のモチーフ組成のためのライト・モチーフとしての役割を失い、全く別個のモチーフと共に並列し、あるいは混合してしまい、モチーフ本来の形式発展の自律的自発性を失っているのである²³⁾。

ここで上原が「X字形の脚が、逆ハート形の外側をめぐってその尖頂上で完結するという団華状の外縁を失い」というのは、前章で指摘したように、玉虫金具の単位文様の巻き込み部分をX字形の脚として切り離して考えることからなされる記述である。この点が誤りであることは前述のとおりであるが、ここで問題とするのは四天王像と救世の宝冠文様を単位文様の变形として様式的

位置づけを考えることの可否である。

(a) 法隆寺金堂四天王像宝冠前額部文様（図7）

この文様の中心となる単位文様は、輪郭が逆ハート形で内部に猪目形空孔をもつ①である。上部は尖拱形Aであり、底部は巻き込まずに閉じたB単純な形である。この単位文様①の下に二つのC字形（C・D）をおき、両側面には二つの半C字形（E・F）をつけている。このような形式の単位文様は玉虫金具文様ではなく、扶余金具の単位文様（1ㄥ図6）と同形のものと考えられるべきであろう。扶余金具は縦長の装飾空間であるため下方二つのC字形（H・I）は背中合わせに立っているが、四天王宝冠では横長の装飾空間であるためこれらのC字形が横に寝かされた形になっているだけである。したがってこの文様は玉虫金具の単位文様とは関連しても、単位文様と関連づけることはできない。

(b) 法隆寺夢殿観音像宝冠中央部文様（図8）

この文様について上原は次のように述べる。夢殿観音像宝冠の正面中央の珠文帯の外輪郭に見るひきがえる形中心飾文であるが、ここでは猪の目形を失った逆ハート形と、空穴の埋まった、そして逆ハート形身部の両側に両手をかけたような形の、あたかも蛙が泳いででもいるような拳手ひきがえる形とが交互に輪形をなして現われてくるのが認められる²⁴⁾。

ここで上原は、猪の目形を失った逆ハート形、空穴の埋まった逆ハート形身部の両側に両手をかけたような形（拳手ひきがえる形）、という二つの形式を指摘している。しかし隣接する半C字形（C・F）の接点に充填された

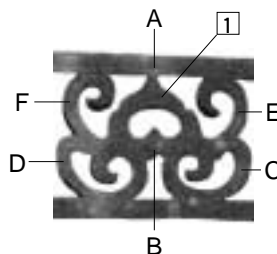


図7 法隆寺金堂四天王像宝冠前額部文様

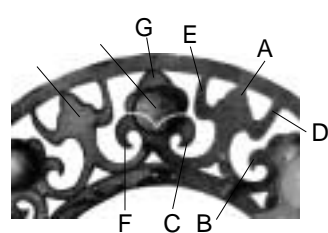


図8 法隆寺夢殿観音像宝冠中央部文様

扇形 G)であって、猪目形を失った逆ハート形ではない。またこの扇形 G を支える格好になっている左右からの半 C 字形は、隣の単位文様の一部であって、これを途中で切断して扇形の一部をなすもののように考えることはできない。

次に は前述 (a) 四天王像宝冠前額部横帯文様の変形であろう。狭い配置空間の中で猪目形空孔を失い、その輪郭も著しく抽象・簡略化したものである。わずかに隆起部をもつ三山形 A は四天王像宝冠の猪目形空孔文¹が圧縮されて内部の猪目形空孔を失ったもので、その下に二つの半 C 字形 (B・C), 左右側面に二つの半 C 字形 (D・E) を配したものであるが、これらは分割できないくらいに一体化している。このような単位文様を並置し、下部の半 C 字形が隣接する部分に三弁の扇形 G を充填したものである。したがって、この文様も扶余金具文様の系統上にあるもので、玉虫金具の単位文様 とは関連づけることはできない。

以上のように、上原が「X 字形の脚を伴う逆ハート形中心飾 (ひきがえる形中心飾文)」の変形硬化した作例とする四天王および救世の宝冠文様は、扶余金具→四天王宝冠→救世宝冠と展開するもので、その単位文様の原形は図 6 で示した扶余金具の単位文様 (1) の下部に二つの C 字形を背中合わせに配した単位文様 (2) である。玉虫金具文様でこの系統に属するのは単位文様 であるが、これは扶余金具の単位文様 (1) の形式で下部には C 字形をもたない形式である。上原のいう「X 字形の脚」とは玉虫金具文様では単位文様 の一部なのであるから、これらを混同して形式展開を考えることはできない。玉虫金具文様では単位文様 と単位文様 は別系統で位置づける必要があり、両者を混同して様式的位置づけを試みる上原説は容認することができない。

2. 法隆寺綱封蔵金銅透彫り金具文様

さて、次に上原はひきがえる形 (X 字形の脚を伴う逆ハート形中心飾) の変形として以下の三種をあげている²⁵⁾。

- (1) 逆ハート形の尖頂部が著しく長く尖った形式
 - (a) 法隆寺綱封蔵金銅透彫り金具 (具体的作例の提示なし)
 - (b) 法隆寺金堂天蓋金具 (具体的作例の提示なし)
 - (c) 法隆寺金堂多聞天像の持つ多宝塔塔頂形
- (2) X 字形脚部がパルメットへ同化したもの
 - (d) 法隆寺綱封蔵の飾金具類 (具体的作例の提示なし)
- (3) X 字形脚部のパルメットへの同化が強化されたもの
 - (e) 法隆寺出土軒平瓦²⁶⁾

ここであげられた法隆寺綱封蔵金銅透彫り金具や金堂天蓋金具は複数枚現存している。しかし上原は具体的な作例図版を提示していないので、上原がどの作例のどの文様部分を指して論じているかは正確にはわからない。以下ではこちらの推察で作例を提示する。

(1) の尖頂部が著しく長く尖った形式であるが、単位文様は配置される装飾空間の形に合わせて変形するものであるから、それによって単位文様の基本形式が著しく変化するのでなければ特に問題にする必要はないであろう。尖頂部が尖るというのは細部的な変化である。ただ上原が (1) と (2) で問題にしたのであろう法隆寺綱封蔵金銅透彫り金具二種は、玉虫金具の二つの単位文様の形式展開を考えるに重要な作例である。

(a) 法隆寺綱封蔵金銅透彫り金具 1 (図 9)

この金具の装飾空間は、まず両端を巻き込む S 字形曲線 A・B を背中合わせに配することで区分される (図 9・)。次に図 9・ に示すように、最下部の巻き込み曲線と外郭の間に単位文様 (a), 中央の空間に各二つずつの半 C 字形 (C・D) と C 字形 (E・F) を伴った単位文様 (b), そして最上部の巻き込み曲線と外郭の間に単位文様 (c) を配置している。あとは残された空間に、図 9・ の C 字形 (G・J), 図 9・ の紡錘形 (K・T), 図 9・ の小さな半 C 字形 (U・X) を充填していけば完成する。

三つの単位文様 (a)~(c) はいずれも内部に猪目形が透かされた猪目形空孔文である (図 9・)。外側の輪郭は、単位文様 (a) と (b) は同形

で上部中央 a がやや尖り、左右に小さな隆起部分 (b・c) をつくる。これは扶余金具の虬龍文系単位文様 (1 頁 図 6) の系統にあって簡略化されたものであり、同時にそれは玉虫金具の単位文様 (図 4) の簡略化でもある。

単位文様 (c) は上部中央と左右の突起部が極端に長く尖っているが、これは三角形の装飾空間を埋めるために単位文様 (a) と (b) の突起部を尖らしたものである。これが三葉全パルメットである可能性は否定できないが、この金具の他の装飾面には明確な植物系の文様要素が見いだせないで、これのみを三葉全パルメットとするよりは虬龍文系猪目形空孔文の単位文様が変形したとするべきであろう²⁷⁾。

注目すべきは文様要素として二つずつの半 C 字形と C 字形を伴った単位文様 (b) である。これらは全体ですでに一つの別の単位文様を形成しているといえるであろうが、その文様構成は、単位文様 (b) の下に置かれるのが半 C 字形である

ことを除き、先にみた法隆寺金堂四天王像宝冠冠帯の文様と同質であり (図 7), つまりは扶余金具 (図 6) の文様構成と同じ系統にあるといえる。また単位文様 (b) の左右に配された半 C 字形は、この金具においては明らかに単位文様 (b) とは別の文様要素として付加されているが、玉虫金具の単位文様 や四天王像宝冠冠帯文様では猪目形空孔文と左右の C 字形との融合が進んでいる。したがって、猪目形空孔文の形式展開としては、法隆寺綱封蔵透彫り金具のものは原初の形をよく保っているものといえるだろう。

上原はこの金具の単位文様 (c) を、X 字形の脚を伴う逆ハート形中心飾の尖頂部が著しく長く尖った形式としてあげている。しかし単位文様 (c) がのせられている巻込み曲線は、先にも述べたように金具の空間を分割する二つの S 字形曲線の一部であって、これを途中で切断して、単位文様 (c) の一部をなす文様要素であるかのように「X 字形の脚」などということはできな

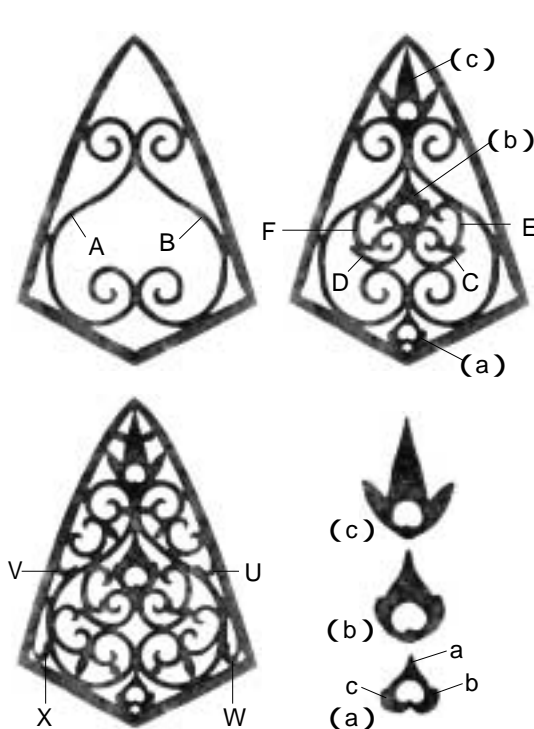


図 9 法隆寺綱封蔵金銅透彫り金具 1 (~)

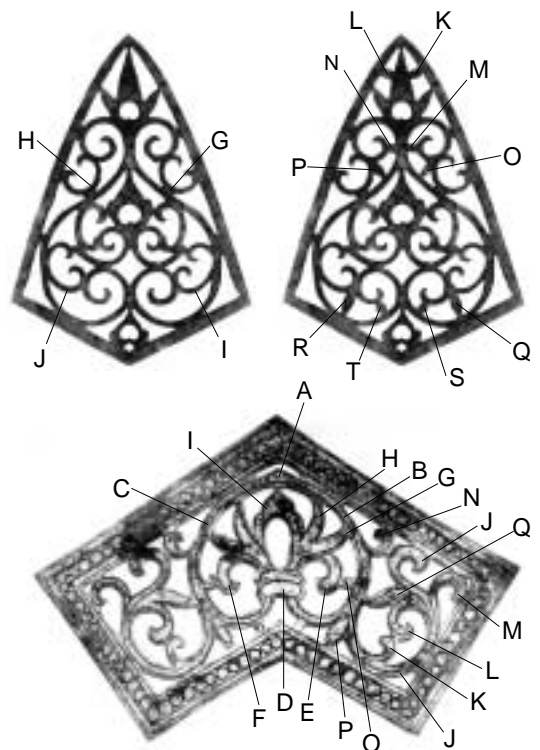


図 10 法隆寺綱封蔵金銅透彫り金具 2

い。これは単に二つのS字形曲線が接触して巻込みをつくる部分に単位文様(c)が配置されるということであり、玉虫金具単位文様のような逆ハート形巻込み曲線をもつものでも、扶余金具に見るような背中合わせの二つのC字形をもつものでもない。

(d)法隆寺綱封蔵金銅透彫り金具2(図10)

(2)のX字形脚部がパルメットへ同化したものについては、上原は同じく法隆寺綱封蔵の飾金具をあげて、「身部の逆ハート形が蕾状に変容され、脚部のX字形は、はっきり葉形を伴った、パルメットとして表わされてくる」こと、「逆ハート形において猪の目形であった空穴は、ここでは杏仁形に変わってくる」ことの二点を主張する²⁸⁾。

これは逆V字形の装飾空間に、先の綱封蔵金具1のような太さの一定した幾何学的な曲線ではなく、肥瘦のある植物性の曲線で文様がつくられている。中央部では起点Aから左右に曲線B・Cが下降して逆ハート形をつくり、二重の結束帯Dで束ねられ、左右に分かれて巻込む(E・F)。この巻き込みEの上にはさらに二つの葉形G・Hが配されて、三葉半パルメット(E・G・H)の形となる。巻き込みFの上も同様である。この左右の三葉半パルメットの間には、尖拱形で左右に小さな隆起部分を持った蕾形Iがかけられ、これと左右三葉半パルメットにはさまれた空間は紡錘形の空孔となる。曲線Bは逆ハート形の下方から曲線Jへと分岐して反転し、曲線Jには半C字形K・L・Mがつけられる。半C字形は曲線Bにもふたつ(N・O)つけられ、曲線Bと曲線Jの分岐点、曲線Jの先端巻き込み部分と半C字形Lの間には紡錘形PとQのふたつが挿入されている。曲線Cの方も同様の構成である。

問題となるのは中央部の逆ハート形部分である。上原はこれを玉虫金具単位文様と単位文様のX字形が複合した文様の形式変化で説明しようとする。そのため論旨が解りにくくなるのであるが、これを単位文様の変形と考えれば話は簡単である。単位文様が扶余金具→四

天王宝冠→救世宝冠と独自に展開しているのであれば、単位文様もそれと同様に独自の形式展開を考えることができよう。玉虫金具では単位文様のなかに単位文様が配置された。しかしこの文様の場合は、単位文様の巻き込み部分に、単位文様ではなく文様要素である葉形と蕾形が挿入付加されただけのことである。玉虫金具単位文様では植物文様の要素は三つの結束帯が指摘されるだけであるが、この綱封蔵金具2では装飾空間全体が植物的文様意匠となっている。こうした作例は、単位文様が虬龍文系単位文様に対して異質の系統に発するものであることを推測する作例として意味づけられる。上原はこの文様を「X字形脚部がパルメットへ同化したもの」という。しかしこれは単位文様が植物的な変容をしたものではなく、本来が植物文様系に発したものであったことを示していると考えてよいだろう。

3. 逆ハート形の中心飾文からの派生形

上原は「X字形の脚を伴う逆ハート形中心飾」の様式史的位置づけの最後に、「X字形の脚が外方に開かず、噴水でも上げるように逆ハート形の内部に向かい、尖頂部を突き抜けて左右に開く、いわば、噴水状X字形の脚をとる形式がある。」²⁹⁾として、玉虫厨子宮殿角柱の縦飾帯文様(図11)をあげている。これと関連するのは玉虫厨子須弥座上框第二段の文様であるが、これら文様の概略と構成法についてはすでに前稿で解説しているので³⁰⁾、ここではそれぞれの単位文様のみを比較検討してみる。玉虫厨子須弥座上框第二段の文様には単位文様が二つ(A・B)あり、これらと宮殿角柱および須弥座腰部隅柱文様の単位文様を並べると図12のようになる。ここでは記述の都合上、須弥座腰部隅柱



図11 宮殿隅柱透彫り文様

の単位文様を①, 玉虫厨子須弥座上框第二段の単位文様Aを②, 宮殿部角柱の単位文様を③, 上框第二段の単位文様Bを④とする。

これらは個々に特色のある独立した形式のようであるが, 上述した須弥座腰部隅柱の文様分析の結果からすれば, いずれも同一系統の形式展開として考えざるを得なくなる。これら四つの単位文様の形式を比較すると, その基本形は①であるといえよう。①では単位文様の内部に十分な空間があるために別の単位文様が組み込まれて配されている。しかしこれがスペースの限られた須弥座上框のような装飾空間に配置される場合, 逆ハート形の先端が①Aのように内部で巻き込む余裕がなく, 上部尖拱形Bの背後を通過して上にのび, 逆ハート形輪郭の外部で左右に巻き込むことになる。それが②である。②は上部山形C左右に小隆起部分をつくる余裕もなく, 細線を刻む山形Cの両裾が下方にのびて逆ハート形に輪をつくり(D), 二重の結束帯Eで束ねられ, その先端は山形Cの背後を通過して上にのび, 左右に巻き込んでいく(F)。この②が上部に空間的な余裕のある状況で配された場合には③ができる。これは②の巻き込み部分Fがさらに上方へと伸び上がったもの(G)で, このGと上部尖拱形Hとの隙間には半C字形Iが充填される。さらに尖拱形Hの裾には隆起部分Jをつくる余裕もみられる。この③の場合とは逆に, ②がより小さな装飾空間に押し込められた場合は④のようになる。ここでは②の巻き込

み部分Fは1本だけとなり(L), ①から③に共通してみられた結束帯(E・K)をつくる余地もなくなっている。以上のように①から④の単位文様を比較してみると, 文様の形式展開はモチーフによる系統づけや起源論とは別に, 文様の配置される装飾空間の相違に留意しなければならないことが認識される。

上原はX字形の脚を伴う逆ハート形中心飾の変形としてこれらを位置づけようとするのであるが, これらは須弥座腰部隅柱の単位文様が配置空間にあわせて変形されたものであって, 上原が「逆ハート形の中心飾文」と名づけた単位文様の変形ではない。

次に上原は「この形式はやがて, X字形の脚そのものを喪失する方向と, 逆ハート形内部での内向性X字形の脚が立華状パルメットによって代置される方向とをとることになる」³¹⁾と述べ, X字形脚を喪失したものの作例として法隆寺戊子年銘釈迦三尊像光背をあげ, これを「ひきがえる形よりの派生的省略形を有する光背」³²⁾としている。問題としているのは「中央円光外輪の底部に, 二匹相對の蟠螭文の尾を結ぶ役割を果たしている逆ハート形の中心飾文」(図13)であるが, これは須弥座腰部隅柱文様の単位文様の系譜上にあるもので, はじめからその文様要素にX字形の巻き込みなど持たない文様である。これは玉虫金具の単位文様の簡略化と考えるよりは, その祖型となる扶余金具の単位文様(1)(図6)が簡略化されたものとするべ

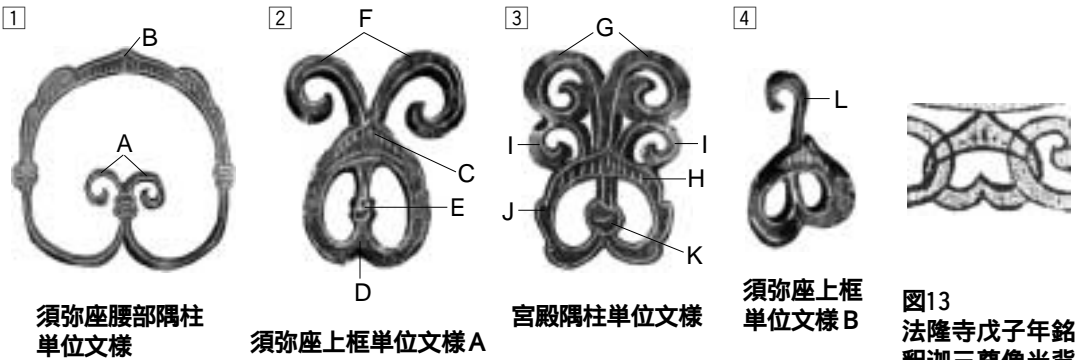


図12 須弥座腰部隅柱・上框および宮殿隅柱金具の単位文様比較



図13 法隆寺戊子年銘釈迦三尊像光背逆ハート形文様

きであろう。上原は「玉虫厨子の例に見る逆ハート形の形式的特徴をそなえている点、その祖型と目されうる玉虫厨子形中心飾文の様式年代を考える上で、注目してよい」³³⁾と、戊子年銘より玉虫文様の方が先行するような言い方をしているが、玉虫金具の単位文様 が扶余金具の単位文様(1)の左右側面にC字形を融合させた形式に展開している点を考えれば、文様形式としては玉虫金具文様のほうを後と考えるべきであろう。

残る「逆ハート形内部での内向性X字形の脚が立華状パルメットによって代置される」ものについては、上原は「法隆寺綱封蔵の金銅透彫金具のなかに、容易にその例を見出しうるのである」³⁴⁾というが、具体的な作例を提示していないのでどのようなものを指すのか理解できない。宮殿軒下楣間の彩色文様を同種のものとしているが、これは宮殿部角柱文様と同じ形式のものである。

以上、上原のいう「X字形の脚部を形式的特徴とした逆ハート形中心飾」の我が国上代における様式史的位置づけを検討してきた。ここで明らかになったことは玉虫金具文様はふたつの単位文様から構成されており、両者はそれぞれ別々の系統として考えなければならないということである。上原はこの基本的な文様分析を誤り、単位文様 の一部(X字形の脚)と単位文様 を結合させたものを一つの単位文様としてしまった。本来存在しない単位文様によって、その様式史的位置づけを試みたのであるから、個々の作例に対して上述してきたような不合理な説明をせざるをえなくなったのである。上原のみならず小杉の組成法分析においても同様であるが、文様分析では、対象とする文様のなかから立論に都合のよい一部分が抽出されて問題化される傾向がある。これは文様要素・単位文様・文様ユニットといった文様の構成概念を明確に規定したうえで文様分析がおこなわれなかった結果であろう。

最後に上原が文様分析および様式史的位置づ

けで提示した作例を新たに系統立てておく。

- 1)玉虫厨子須弥座腰部隅柱透彫り文様は性質の異なる二種類の単位文様 と から構成される(図3・)。
- 2)単位文様 は虺龍文系文様であり、内部に猪目形空孔をもち、外縁にC字形虺龍文の特徴である瘤節が形式的に整理された形をもつ(図4)。
- 3)単位文様 の祖型は扶余陵山里古墳出土透彫り金具文様の単位文様(1)であり、単位文様 はこれが形式化されたものである(図6)。
- 4)玉虫厨子文様では、単位文様 は左右にふたつのC字形文様要素が融合された形へと形式展開する(図4)。
- 5)法隆寺綱封蔵金具1や戊子年銘光背円光外輪の底部に用いられる単位文様は、扶余金具の単位文様(1)が簡略化された形式であり、玉虫厨子単位文様 からの変形や派生ではない(図9・・13)。
- 6)扶余金具の単位文様(1)は下部に背中合わせの二つのC字形が配されて新たな単位文様(2)をつくる(図6)。この単位文様(2)は法隆寺四天王像宝冠に使用され、その簡略化されたものが救世観音像宝冠の文様となる(図7・8)。
- 7)扶余金具文様は玉虫金具文様の祖型とされてきたが、正確には玉虫金具単位文様 の祖型であるだけで、単位文様 は別系統で考える必要がある。
- 8)単位文様 は輪郭は逆ハート形であるが、内部に巻き込み部分があり結束帯をもつ(図3・)。これの変形したものが玉虫厨子須弥座上框第二段と宮殿部角柱文様の単位文様である(図12)。
- 9)単位文様 は法隆寺綱封蔵金具2の形式展開にみられるように、植物系の単位文様としての系統を考えなければならない(図10)。

注

- 1)山本謙治「玉虫厨子透彫り金具虺龍文系文様の造形分析 コンピュータ利用による文様分析の一例として」『阪南大学学会』『阪南論集 人文・自然

科学編』第36巻第2号, 2000年, 1-14ページ。

- 2) 伊東忠太「玉虫厨子の文様と其源流」『仏教美術』第13冊, 仏教美術社, 1929年, 57-65ページ。
- 3) 小杉一雄「玉虫厨子に見えたる文様の源流 分立流雲文に就て」『夢殿』第14輯, 1935年, 17-40ページ。同『中国文様史の研究 殷周時代爬虫文様展開の研究』新樹社, 1959年。同『日本の文様 起源と歴史』社会思想社, 1969年。
- 4) 同稿においては主として小杉の複合形組成法について批判検討した。山本前掲論文10-13ページ。
- 5) この論文は『玉虫厨子 飛鳥・白鳳美術様式史論』(吉川弘文館, 平成3年)に「第二 玉虫厨子制作年代考 八 文様意匠より見た玉虫厨子の様式年代」(253-274ページ)として所収されている。本稿での引用は同書を使用する。
- 6) 彩色文様に関する上原説の論旨は次の3点である。
彩色文様のうち, 台脚刳形側面に描かれた龍首文は楽浪出土の漢代の例と同系統である。彩色文様のうち, パルメット文様は(a)冠華状パルメットおよび立華状パルメット, (b)連続波状唐草のパルメットの二種に分類できる。(b)連続波状唐草のパルメットは全パルメット形式によって統一されており, その様式年代は, 大半が半パルメット形式である他の日本上代の遺品を遡る。
- 7) 上原は透彫り文様に関する伊東の甲乙分類には賛成しているが, 各類個々の文様の検討は行っていない。また類文様の起源を分立爬虫唐草とする小杉説を無批判に全面的に継承しているが, 小杉の文様分析には大きな欠陥がある。これについては注4を参照。
- 8) 上原は小杉が問題としなかった甲類文様についても, これを乙類同様に蠕螭文系動物モチーフが起源であるとした。その理由としては, 甲類文様に彩色文様において最も特徴的であるギリシャ風の半円菊花形全パルメットがまったく見られないことをあげ, 西方発生の植物モチーフよりなる唐草文とは系統上・形式上別種のものであるとした。上原の指摘のように甲類に全パルメットが見られないのは確かであるが, これをもって甲類を植物モチーフでないとは断言できない。彩色文様に明快な植物的表現が濃厚であり, その点が透

彫り文様の表現との大きな相違であることは確かである。しかし, これに関しては彩色文様を手がけた画工集団と透彫り文様を制作した工人集団の相違, それら集団が身につけていた新旧様式の問題を考える必要がある。

- 9) 上原和, 前掲書, 268ページ。
- 10) 伊東の乙類文様6種の図版は紙面の都合で省略する。山本前掲論文2-4ページの図を参照されたい。伊東の乙類番号と山本の図番号は以下のように対応する。1→(10), 2→(8), 3→(9), 4→(6), 5→(6), 6→(7), 7→(2)。
- 11) 上原, 前掲書, 268ページ。
- 12) 伊東忠太「玉虫厨子の文様とその源流」『仏教美術』13号, 1929年, 63ページ。
- 13) 上原, 前掲書, 270ページ。
- 14) 小杉の複合形組成法については注4を参照。
- 15) 上原, 前掲書, 270ページ。
- 16) 長広敏雄は「装飾意匠と文様」(『世界考古学体系16』平凡社, 1962年)において, 装飾文様の研究では文様の方法を探究することが必要であり, 「文法における単語に相当するのが, 文様では単位モチーフ(いわば形式語)である。単位モチーフは, 動物, 植物などの生物的形象と幾何学的図形にまづ分類される。それら単位モチーフが, 遺物上に, いかに表現されているかをしらべる。いわゆる文様構成法であって」と述べている。同書86-87ページ。
- 17) 林良一「玉虫厨子の製作年代」『国華』939, 1971年, 19ページ。
- 18) 注4を参照。
- 19) 逆ハート形の関連作例は杏葉などの馬具類に多いが, 単純な逆ハート形の輪郭文様と, 巻き込みのある逆ハート形では造形的な系譜は異なると考えたほうがよいように思われる。これについては別稿をなす。
- 20) 山本, 前掲論文, 11-13ページ。
- 21) 上原, 前掲書, 270ページ。
- 22) 同上書, 271ページ。個人的な感覚に基づいた「ひきがえる形中心飾文」という名称は不適切なものであるが, この名称に関しては前稿9ページを参照されたい。

- 23) 同上書, 271ページ。
 24) 同上書, 271-272ページ。
 25) 同上書, 272ページ。
 26) いわゆる法隆寺式均正忍冬唐草文宇瓦のことで、この均正半パルメット波状唐草文の中心飾りについては、葉飾、芯をハート形につくったもの、三葉半パルメット結節形の変容、といった植物系文様として解釈する諸説がある。これに対して上原説は、蟠螭文系である須弥座腰部隅柱文様のX字形脚部が植物系のパルメットへ完全に同化した形式だと位置づける。宇瓦の装飾空間では、中央の結節部分から植物文として極めて流麗な半パルメット波状唐草が左右に伸長しており、そこにあえて非植物系の要素を持ち込んで解釈するよりは、結節部分からも三葉半パルメットが左右に立ち上がり、それが反転して葉先が結びついた形が基本となり、これが装飾的に変容された形であると考えたほうが自然であるように思える。上原はこの文様については別稿として「法隆寺と玉虫厨子(二)法隆寺様式に見られる風土的形式変容(和様化)について 法隆寺軒平瓦唐草文に見られる玉虫厨子節文の影響」(『国華』905, 1967年、

前掲書331-339ページ所収)を発表している。本稿では紙面の制限上、この論文にまで言及する余裕がないので、この問題に関しては稿を改めることにする。

- 27) 紡錘形は植物文系の文様要素とは断定できない。
 28) 上原, 前掲書, 272ページ。
 29) 同上書, 272ページ。
 30) 山本, 前掲論文, 3-5ページ。
 31) 上原, 前掲書, 272ページ。
 32) 同上書, 273ページ。
 33) 同上書, 272ページ。
 34) 同上書, 272ページ。

〔付 記〕

本稿は2001年度阪南大学産業経済研究所助成研究(C)「5~13世紀文様作例に対するコンピュータ文様分析法の応用とデータベースの設計構築」の成果報告の一部である。なおコンピュータによる図版の取り込み、修正作業、データベース作成等には同志社大学大学院博士前期課程在籍の中尾洋子君に協力を得た。ここに記して感謝する。

(2002年1月29日受理)